

特集「システムソフトウェアの新しい潮流」の 編集にあたって

亀 田 壽 夫†

「システムソフトウェアとオペレーティングシステム」研究会では、時代のニーズにマッチした新しいシステムソフトウェアのあるべき姿を追求してきました。特に、この数年は、ネットワーク、モバイル、マルチメディア時代を迎え、システムソフトウェアの重要性が改めて認識されており、従来のシステムソフトウェアの話題に加え、連続メディアの扱い、高速ネットワーク、モバイル・コンピューティング、並列分散処理、組み込み型システムのためのソフトウェアに関して活発な議論が行われてきています。

「システムソフトウェアとオペレーティングシステム」研究会は、1999年から、毎年、次世代情報基盤を担う新しいシステムソフトウェアに焦点をあてた論文の特集を組んできました。本特集は、その4回目にあたります。本特集の編集のために、上記研究会の主査、幹事、運営委員を中心として編集委員会が構成され、今回は、ゲストエディタとして、私に加わりました。

本特集に対して、24件の論文投稿があり、採録論文の決定は次のように行われました。第1回委員会において、各投稿論文に対し、投稿者と所属組織が異なるメタレビューアを1名、レビューアを2名選定しました。第2回委員会において、第一次判定が行われ、13件が不採録、11件が条件付き採録と決定され、著者に連絡されました。第3回委員会において、改訂再投稿された11件のうち、9件を採録することに決定し、論文誌編集委員会に報告することになりました。不採録理由の大半が論文の書き方であると判断されました。

各メタレビューア、レビューアは、論文を深く理解して査読し、委員会において高度な議論が交わされる様子を見受けました。これは、分野の近い専門家が多数集まっている特集編集委員会の利点と思われます。また、本委員会では、論文に関係している委員は、その論文の審議中は座を外しており、各委員は、他委員の関係している論文に対しても、客観的に対処していると見受けました。この手続きは、過去の特集と同

じであり、査読の基準・方法も変わらないとのことです。しかし、この4回の特集における論文採録状況は、[1999年]採録14/投稿19、[2000年]採録11/投稿16、[2001年]採録11/投稿21、[2002年]採録9/投稿24、となっており、年を追って採録率が下がってきています。特集編集委員会で、最後にそのことに話がおよびましたが、投稿数が増えた結果、投稿論文のレベルの分散が広がったことなどが理由にあげられました。

ここ数十年間、また、十数年前私自身が直接オペレーティングシステム研究会の運営に携わっていた頃に比べても、非常に多くの人材が質・量ともに育ってきたことを、この特集編集委員会に加わって、実感することができました。ITの根幹である「システムソフトウェアとオペレーティングシステム」の研究開発が今後も順調に発展していくことに期待が持てますし、またそうあり続けることを強く望みます。

「システムソフトウェアの新しい潮流」特集編集委員会

- ゲストエディタ
亀田壽夫(筑波大)
- 編集委員(五十音順)
石川 裕(東大)、猪原茂和(日立)、梅村恭司(豊橋技科大)、大久保英嗣(立命館大)、岡村英明((株)ソニー CSL)、加藤和彦(筑波大)、木下俊之(日立)、河野健二(電通大)、河野真治(琉球大)、最所圭三(香川大)、斎藤彰一(和歌山大)、柴山茂樹(キヤノン)、新城 靖(筑波大)、高汐一紀(電通大)、高田広章(豊橋技科大)、竹内 理(日立)、谷口秀夫(九州大)、寺岡文男(慶応大)、徳田英幸(慶応大)、福田 晃(九州大)、中島達夫(早稲田大)、並木美太郎(農工大)、西尾信彦(慶應大)、樋地正浩(日立東北ソフトウェア)、光澤 敦(ソニー)、毛利公一(農工大)、吉澤康文(農工大)、和田英彦(横河電機)

† 筑波大学